新聞感想文コンクール　高校生の部

吉野川市のNPO法人
TICO設立30周年

気候変動による干ばつや貧困、医療と教育資源の不足―。困難に追い込まれた途上国の人々の支援に奔走してきたNPO法人「TICO」（吉野川市）が2023年、設立30周年を迎える。アフリカ南部ザンビアを中心に、これまで国内外で手掛けたり、メンバーを派遣したりした事業は100を超える。今後も国際協力のトップランナーとして持続可能な未来の構築を目指して走り続ける。

途上国 難民に医療届け
持続可能な自立支援 追求

心臓外科手術の指導に当たる松村医師（左）と江川医師（左から2番目）＝ザンビアの首都ルサカ

「敗戦後、日本の医師たちは米国やドイツで医療技術を学んだ。その恩を返すつもりで、途上国を支援してきた」。22年6月、未来につながる地域貢献活動や顕著を顕彰する「徳島新聞賞」大賞の授賞式で、吉田修代表理事は強調した。30年の活動を支えてきたのは、「同じ星に住む『地球人』として助け合うべきだ」という「ボランタリースピリット」だ。

ザンビアでの保健衛生指導や井戸の整備事業、妊婦のための「お産を待つ家」の建設、カンボジアでの救急医療支援―。医療、保健分野を中心に据えた数年単位の活動のほか、ルワンダやモザンビークでの難民に対する医療支援など、緊急的な人道危機にも対応してきた。22年3月にはロシアに侵攻されたウクライナ避難民の支援にいち早く立ち上がり、吉田代表理事らが隣国ハンガリーで医療提供に当たった。

活動に必要な費用は、国際協力機構（JICA）や医療支援団体などからの助成のほか、寄付金で工面する。

幅広い国際支援活動に引かれ、TICOには県内外から多くの医療関係者が集まり、事務局のあるさくら診療所（吉野川市）で働くなど地域医療にも貢献している。診療所の松村武史院長（大阪府枚方市出身）もその一人。8年前、心臓外科医として勤務していた順天堂大医学部付属順天堂病院（東京）を辞め、徳島の地を踏んだ。

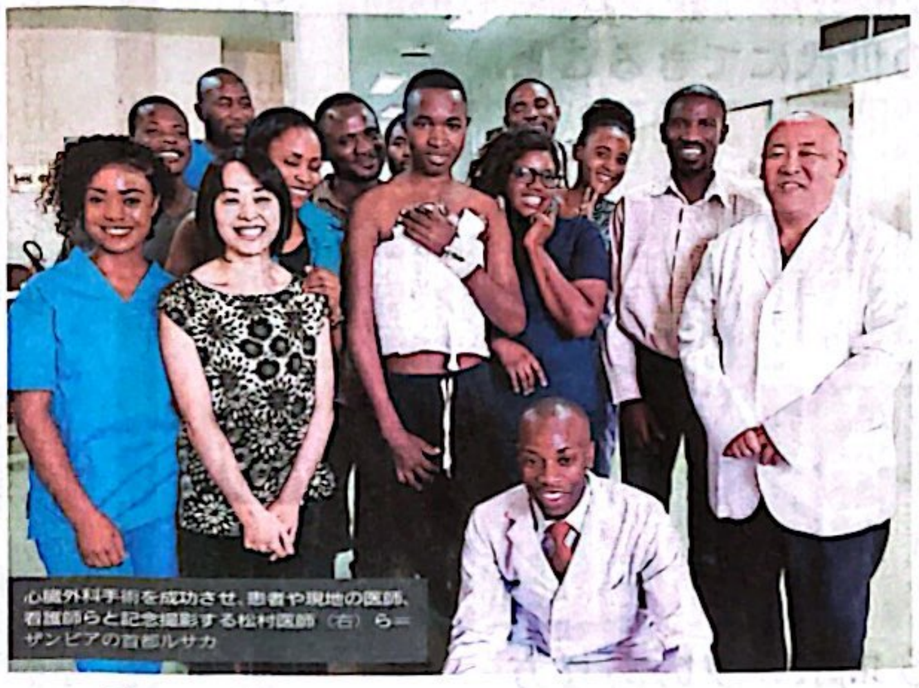
上原さまの手術を執刀したことで知られる天野隆医師の下で研さんを積んだ松村医師は、青年海外協力隊での活動経験があり、「医師人生の後半は、習得した技術を途上国で生かしたい」との思いを温めていた。17年からスタートしたザンビアの心臓外科医を育成するプロジェクトで、リーダーを担う。

コロナ禍で中断を余儀なくされたものの、現地医師による手術事例はこれまで9回の渡航で26例に上る。松村医師や、四国こどもとおとなの医療センター（香川県）元副院長の小児心臓外科医、江川尊康医師が指導。難易度の高い手術も現地医師だけで徐々に対応できるようになっており、松村医師は「外国チームに執刀してもらわなくても、彼らが自国の患者を自分たちで助けられる未来が見えてきた」と、手応えを口にする。

活動に通底するのは単なる物品・技術提供にとどまらず、持続可能性を追求した自立支援だ。吉田代表理事は「地球規模の気候変動を見据え、自然との共存を目指しながら途上国の人々の生活の質の向上や貧困解消を目指していく」と、新たな目標を見据えている。（乾栄里子）

TICOの沿革と、主催したりメンバーが参加したりしたプロジェクト

1993年	11月　TICO設立
94年	モザンビーク、ブータンで難民支援
95年	ルワンダ難民支援
97年	ザンビア・ルサカ市のンゴンベ地区で子どもの栄養改善プロジェクト
2000年	ザンビア・ルサカ市カニヤマ地区でコレラ予防対策プロジェクト、ンゴンベで母親への保健衛生指導・職業訓練プロジェクト
02年	ザンビア・チョマ郡ンポレ村でため池修繕事業
03年	ザンビアで「農村開発ローン制度」開始
07年	カンボジア・プノンペンで救急システム構築事業、ザンビア・チポンボ郡で保健指導事業
09年	ザンビア・モンポシ地区で診療所開設
12年	モンポシ地区で妊婦の待機施設「お産を待つ家」開設
14年	ザンビア・チサンバ郡で、農村での母子保健支援事業
17年	ザンビア・ルサカ市での心臓外科医育成プロジェクト開始
22年	カンボジア・バッタンバン州での救急医療支援事業開始


心臓外科手術を成功させ、患者や現地の医師、看護師らと記念撮影する松村医師（右）ら＝ザンビアの首都ルサカ

環境保全と貧困対策両立へ
吉田医師インタビュー

―TICOは30年間、国際支援活動に奔走してきた

Water（水）、Agriculture（農業）、Health（健康）、Education（教育）の頭文字を取ったWAHEという考え方を基に取り組んできた。きれいな水と気候変動に強い持続可能な農業、健康と教育の四つがそろわなければ、人々は豊かな生活を送れない。いずれも貧困問題と密接につながっており、全ての面からのアプローチが必要だ。

―印象に残っている活動は

ザンビアの農村部で少額ローン制度を取り入れ、現地の女性たちの事業を支援したことがある。養鶏やヒマワリ油の生産、売店経営など内容はさまざまだったが、皆自分でビジネスモデルを確立して無事に返済した。国際協力というと、物品や金銭的支援をしてしまいがち。しかしノウハウと仕組みを提供し、一時的な資金を用意すれば自立につながる。あらためて、国際協力の在り方を考えた。

―30年を振り返り、どのような思いがあるか

TICOが歩んだ30年は、日本の衰退の30年ともいえる。経済成長が鈍化し国際社会から日本の存在感が薄らぐ一方、途上国の発展は目覚ましい。ザンビアも経済格差が大きな国だが、首都ではショッピングモールが乱立し、富裕層も増えた。実情に合わせ、支援の方法や在り方を変えていく必要がある。

―今後のビジョンは

ザンビアなどアフリカ南部では焼き畑などによる森林消失が進み、大規模な干ばつ被害が起きている。気候変動問題は待ったなしで、環境に配慮した農業や畜産業に対する支援が今後、求められるだろう。今、ザンビアで持続可能な農業「グローバル・クーリング・ファーム」を試験的に始めている。日本や他の先進国でも参考にできるようなシステムをつくり、環境保全の視点から、食料不足や貧困問題にアプローチしていきたい。

隣国ハンガリーで、ウクライナ避難民の医療支援に取り組んだ吉田医師（右から2番目）

最優秀

近藤 麻友さん
徳島文理1年

生きるということ

二〇一九年十二月、ニュースで中村哲医師が人道支援中のアフガニスタンで銃撃されて亡くなったことを知り衝撃を受けた。中村医師は三十五年もの間、戦争と水不足に苦しむアフガニスタンで医療支援と水資源の確保に尽力し続けた人だ。人生を困難なものにしても道徳観念と強い意志で自らの取るべき道を最期まで貫いたその生き方に胸が熱くなった。

新しい年を迎えた一日の新聞を開きTICOの記事を読んだ時、私は中村医師と同様に途上国で支援活動を行っている団体が徳島にもあることに驚き心が動かされた。最も共感したのはWAHE（Water、Agriculture、Health、Education）の考え方を基にした途上国の持続可能な自立支援を目指していること。途上国の人々の生活を改善するためには医療支援だけでは不十分で、安全な水と衛生的な環境、地域の生態系を壊すことない持続的な農業、栄養のある食料を得られるようにすることが不可欠である。そこでは現在住民が共に働き、学び、将来的には住民達が主体となり助け合いながら働き生活できるよう導く必要がある。重要なことは現地の人々が自分達の力で生きていけることであり、その力を付けるための支援が使命であるはずだ。だからこそ、TICOが行って来た活動はとても意義深い。アフリカのザンビアを中心に行われている医療や農村開発はまさにそれだ。医療においては支援にとどまらず、指示指導を行い、現地の医師が難しい手術をこなすまでになっており、農業においても開発ローン制度を導入し、現地の女性が収穫物を販売するなどのビジネスができるまでに発展させているそうだ。日本とは文化の異なる現地の人々に知恵や技術を伝えることは苦難が多かったことだろう。けれども、国境を越え信頼関係を築くことができたのは、現地の人達のことを想い生活改善するために先頭に立って共に行動し続けたからだろう。日本人医師と並んで写真に写る現地の医師や看護師、患者の笑顔は清しく生命力にあふれている。

人は争いを起こし街や村を破壊し命を奪うことができる一方、途上国に住む人々に寄りそい心身共に豊かにしていくこともできるのだ。すべては人の生き方の選択にかかっている。「どうしたら自分の力を最大限に発揮し、人のために使えるのか」私はそんな風に考えて生きる道を選びたい。人は誰しも一人では生きていけない。それぞれが自分のできることで役立てるよう知恵を絞り行動し、協力し合い助け合う。それが生きるということなのだと思う。人は大きなつながりの中で存続し、そこで関わる人達のお陰で自分が存ることを忘れてはいけない。私は周りの人達を大事にしながら毎日をもっと大切に生きていきたい。

現在、アフガニスタンやザンビアでは中村医師やTICOの活動が根付き、現地の人達に引き継がれているそうだ。人の力は尊い。

【紙面編集】廣瀬陸学

徳島新聞　2023年1月1日付「吉野川市のNPO法人 TICO設立30周年」から